

「デジタルの形見」と供養儀礼のデザイン

日本宗教学会 第73回 学術大会 第14部会

2014年9月14日（日）於 同志社大学今出川キャンパス良心館

瓜生 大輔

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科 特任助教

uriu@kmd.keio.ac.jp



誰かの死後、コンピューターの中に残された文書や写真、映像などはいわば「デジタルの形見」として遺族のもとに残される。ソーシャルネットワーク（SNS）上に残される情報もまたデジタルの形見の一形態と言えよう。米国 Facebook 社では、遺族からの要望を受けて故人の Facebook アカウントを「追悼ページ」として切り替える措置を取っている。デジタルカメラやスマートフォンの普及にともない、誰もがより手軽に高品質なデジタル写真記録を行えるようになったことは、ひとりひとりの一生に残される写真の量が 35mm フィルム時代とは比べ物にならないほど膨大になることを示唆する。私は、デジタルの形見、とりわけ大量に残されるデジタル写真を、遺族が故人を偲ぶ行為や、死者供養・先祖供養のための儀礼に活用できないかと考え、コンピューターに関わる諸技術を駆使した供養儀礼のデザインに取り組んでいる。

Fenestra（読み＝フェネストラ、ラテン語で「窓」という意味）と名づけられた家庭用の祭壇は横長のフォトフレームと円形の鏡そして球体のキャンドルホルダー（蠟燭立て）

の三点から構成され、普段はごく普通の写真立てや鏡として使用可能だ。使用者が故人を偲ぶあるいは供養の儀礼を行いたいときには、「鏡をじっとのぞきこむ」か「ろうソクに火を灯す」。鏡をじっとのぞきこむと一時的に故人の面影（遺影）が現れる。ろうソクに火を灯すとフォトフレームの画面上には故人が健在だった頃の写真が、鏡には故人の面影が現れ、ろうソクの炎の動きにしたがってそれぞれの写真がゆらゆらと揺らめいたり、別の写真に切り替わったりする。Fenestra にはろうソクの炎や人の動きを検知する各種センサーや、専用のソフトウェアがプログラムされたコンピューターが内蔵されており、このような変化を実現する。普段はごく普通の日用品として生活空間に溶けこむが、「鏡をじっとのぞきこむ」か「ろうソクに火を灯す」ことにより、故人と「逢える」特別な道具へと変化する。

既存の汎用型のコンピューターは故人を偲ぶためには味気ない。ネットショッピングや友人とのメール交換を行う装置が死者供養や先祖供養の行為を担うのには抵抗感があるだろう。従来、死者供養・先祖供養の代名詞であった伝統的な仏壇の売上は下降の一途であり、小型のものやモダンな意匠を持ったものなどが販売されるようになった。昨今は、仏教に依存した葬送や供養に関わる行事について批判的な議論もあり、墓や仏壇を所有せず、手元供養などを選択する現象も現れてきた。Fenestra をデザインするにあたり、宗教や宗派を気にすることなく使用できること、現代的な日常生活空間に導入しても違和感のない意匠、そして故人を偲ぶ、供養の儀礼を行う時とそうでない時（通常時）を「明かりを灯す」という行為で切り替えられることに重点を置いた。ろうソクを使うアイデアは、仏教やキリスト教などといった既存の宗教空間で用いられていることを参考としたが、特定の宗教儀礼や作法をデザインに取り入れたものではない。むしろ特定の宗教・宗派を持つ人もそうでない人も分け隔てなく使用してもらいたいと考えている。炎を灯すという行為と「故人と逢う」という感覚がつながっていると感じられるよう、コンピューターを操作するという意識なく使えるように配慮した。

Fenestra がもたらす経験を明らかにし、実用化等も視野に入れた際の問題点の是正を行うために、昨年末、数年以内に身内を亡くした経験を持つ三名に依頼し、それぞれの家庭に Fenestra を貸し出し、偲ぶ対象となる故人の写真を格納した状態で試用してもらった。使用者と故人の関係性（続柄や親密さ）や亡くなってからの経過時間、現在の生活環境などに応じた、Fenestra のデザインや機能に対する多様なフィードバックを得た。これらの様子については、私の博士論文の中でまとめたが、機会を改めて詳しく報告したい。

Fenestra 紹介ウェブサイト：<http://fenestra.jp>

瓜生大輔研究紹介：<http://uriuri.org/DAisukeURiu/>